

「いらっしやいませ」

「クリーニングをお願いします」と言って、カウンターに洗濯物を乗せた。

「当店のご利用は初めてですか？」

「はい、そうです」

「ではお名前とご連絡先をお願いします」

「モリヤです。電話が二一—四四七一です」

「モリヤ様の漢字は、森林の『森』に『谷』という字でよろしいですか？」

「いいえ、うかんむりの『守る』に屋根の『屋』になります」

「はい、わかりました・・・」店員は早速受付票に守屋の名前を記入して、洗濯物の仕分けを始めた。

「スカートが二枚、こちらはドライクリーニングのスタンダードコース、シルクのニットが一点、こちらはエクセレントコースになります。ワイシャツが四枚、ズボンが二本、こちらはスタンダードコースです。それからダウンコートが一着ですね。こちらはエクセレントコースになります。以上十点でよろしいでしょうか？」

「はい、結構です」

店員は記入を終えると、電卓に金額を打ち込んで会計を始めた。

「ドライクリーニングの物は、明日の四時以降ならお渡しできます。エクセレントコースの物は二十二日の仕上がりになりますので」

「二十二日ですか？ もう少し早くなりませんか？」

「お急ぎでしたら、エクспレスコースにすることもできますが」

「エクспレスコースでしたらいつできますか？」

「四日後の仕上がりになります」

「四日ですか・・・このシルクのセーターなんですけど、どうしてもあさって着る予定にしているので、なんとかそれまでにお願いできないでしょうか？」

店員はカレンダーに目をやりながら、

「わかりました。こちらは大至急ということで、明日業者さんに話しておきます」

「よろしくお願いします。無理言っすみません」

「それでは守屋様、お会計の方が全部で七千二百円になります」

守屋は財布から七千円と小銭の二百円を取り出して店員に渡した。

「七千二百円丁度お預かりします。少々お待ち下さい」

店員はレシートと控えの用紙、それからサービスクードを差し出した。

「こちらは、サービスクードになります。スタンプが一杯になりますと、二割引になります。それからお誕生日にご来店いただきますと、四割引になりますのでどうぞご利用下さい」

「わかりました。ではお願いします」

守屋はサービスクードとレシートと控えをもらって出口に向かい、

「ありがとうございました」という店員の声を背後に聞きながら店を出た。